

たいまつの照らすもの

——周作人と性科學——

森 雅 子

性は、人類にとつて生殖と愉樂の根源、すなわち生の原點である。にもかかわらず、十九世紀になるまでそれはまったく闇の中にあつた。否、むしろそれ自體が闇そのものであつたと言つてもいいだらう。その闇に光をあてたのが、十九世紀末、ヨーロッパに興つた近代性科學である。英國の性科學者ハヴロック・エリスは開拓者のひとりであつた。

彼は「性のエンサイクロペディア」ともいふべき代表的著作 *Studies in the Psychology of Sex* (以下「性の心理研究」) 序文でつきのように語る。「性の問題は——人種的な問題もそれに伴つていゝが——解決しなければならぬ問題として來るべき世代の人々の前に立ちはだかつている。性は人生の根底に横たわるものである。そして我々は、性をどのように理解するのかわからなければ、人生を畏敬することも學ぶこともできない」と。

ハヴロック・エリスは闇そのものである性を照らすため「冷靜な飾らない光」つまり性科學といふたいまつを手にする。エリスは言う、「道德の世界において我々自身が光を運ぶものであり、そして自然界の過程は我々の中で肉になる。短い期間の間ではあるが、もし我々が

そうしようと思えば、我々の道を圍んでゐる闇を照らすことが許されてゐる。ルクレティウスは古代の松明競争を見て、あらゆる人生の象徴と考へたが、我々は松明を手にして人生のコースを進んでゐる。すぐ後から我々を追い抜くであろう選手がやつてきてゐる。我々の最上の方策は、我々自身が闇の中に消えて行くとき輝く、燃えさかる松明を彼らの手に渡すことである」と。

周作人もまた、「過去と未來が相遭う」近代中國の夜明け——五四時期にあつて、そのたいまつを手にしたひとりであつた。

一、おんなと子ども——「人間の文學」

周作人が五四時期の寵兒として、とくにその名を轟かせたのは一九一八年に發表した「人間の文學」によつてだつた。この文章は、新文學運動の聖典になる。それは「女性」と「子ども」の發見、ひいては人間の再發見という近代的な人道主義的立場によつて、時代の求める潮流と合致したからである。

周作人は「人間の文學」とはなにかを言うに際して——そもそも「人間」とは何かを考へる。人間とは「動物より進化した人類」つ

まり動物性を遺していると同時に進化に従ってより高い精神性を獲得したものの、つまり、人間とは魂と肉體の二重の生活であり、過去の人間が考えていたような魂と肉體の二重的なものではない。肉體は獸性、魂とは精神性のはじまりであり、そのふたつを併せ持ったものだけが「人間性」と呼べるのだとする。

そこでまず文學で主要なテーマとなる「戀愛」については、肉體的な男女の關係のみならず、精神性によつて高められた「男女という兩性に基づく平等」なものでなければならぬと定義し、理想的にはその延長としての「戀愛による結婚」が求められるとする。

結婚の當然の結果として親子の關係が生まれる。そこで親子の愛が問題となる。父母と子どもの愛情は「天性に基づく」もの、「天性の愛であるから、人爲的に束縛してその成長を妨げる必要はない。……生物の現象からみれば、父母が子どもを生むのは、まさに自然の意思である。性的生活があれば、自ずと生命の延長と哺乳の努力があり、これは動物であればみなそうである。それが人類になると、戀愛による合一や自我の延長について、より意識的になり、そのため親子の關係はとりわけ深く濃くなる。」

こうした人間認識に従つて「人間の文學」を提唱する際、周作人がまず目を向けるのは、「人間」のうちでもとりわけ女性と子どもである。彼女、彼らが救済され人間らしく扱われるために必要なのは「人道主義」という人間性への覺醒である。「女性」の發見は、當時の『新青年』における數々の婦女論の盛行が強力な背景としてあるだろう。「イプセン主義」における家庭問題の提起、貞操論をめぐる婦人解放論——周作人も與謝野晶子の「人及び女として」を「貞操論」として翻譯紹介する。子どもの發見というならば、兄魯迅は『狂人日

記』の最後で「子どもを救え」と叫ぶし、また「我々はいまどのようなにして父親となるか」のなかで「自分は因襲の重荷を背負い、暗黒の閨門を肩で止め、彼らを廣々とした光差す場所に放してやろう。その後幸せに暮し、合理的に人間になる」と言う。周作人は明らかに魯迅と意識を共有していた。こうして彼の考えは一氣に時代の思潮となり、周作人は五四新文化運動の指導者となる。この啓蒙運動における周作人の軌跡と意義については、舒蕪が『女性の發見』の序文ですでに論ずるとおりである。

だが、五四の啓蒙運動で強力なリーダーシップを發揮した周作人の女性と子どもの發見には、極めて個人的な契機が潜んでいる。それを明らかにするのが、この一文のテーマである。

二、エリスとの出会い

周作人は一九〇六年、結婚の爲紹興に一時戻つて來ていた兄魯迅に連れられて、はじめての異國である日本東京の地を踏んだ。彼は一九一一年秋に歸國するまでおよそ五年の時をここで過ごすことになるが、留學生活のなかでも大きな收穫のひとつだったのが、東京の書店——丸善や中西屋から購った數々の西洋の書物との出会いである。

東京の書店、と言つてまず思い出すのはやはり丸善である。……一九〇六年にはじめて目にしたのは日本橋通三丁目の丸善、……わたしが丸善で書物を求めるようになってかれこれ三十年にはなる。古い馴染みだといつていいだろう。取引したのはほんのわずか、その後和書や中國の舊書を買わねばならなくなって金もそのみに費やすことはできなくなつたが、これらすこしばかり

の洋書はわたしに極めて大きな影響を與えてくれた。だから丸善はひとつの法人であるとはいへ、わたしにとっては師友のよしみがあるといつてよいだろう。⁽⁹⁾

周作人生涯の購書歴からすれば「ほんのわずか」といえるかも知れないが、周作人と丸善の關係は留學中のみならず、歸國後も丸善の廣報誌『學燈』を取り寄せ、洋書に限らず和書も頻繁に注文することでも續いていく。留學當時について少しく述べるならば、例えば彼は一九〇九年に魯迅と共同で、『域外小説集』を出版するが、その材料となったハンガリー、ロシア、ポーランドといったいわゆる被抑壓民族の文學作品はすべて丸善で求めている。⁽¹⁰⁾しかし、當時は日本國內でもまだ、とくに東歐文學などあまり注目されておらず、英譯本も少なかったから、バイカーによる『A Guide to Best Fictions』などを頼りに、これぞと思う書名を抜き書きしては丸善に注文したのであった。貧しい官費留學生にとっては本を買う資金も潤澤ではない。彼はアンドルー・ラングとハガードの合作『The World Desire』を「紅星逸史」として翻譯し、商務印書館に原稿を賣つては金をつくる。そしてその金でツルゲーネフ小説集全十五巻を得、ブランドス Poland: a study of the land, people and literature ウェスタマーケ The Origin and Development of the Moral Ideas' ブッチャーによるギリシャについての講義など、周作人の西洋文明理解の基礎となる重要な書物を丸善で求める。そのなかでも、

最も重要なのはエリスの『性の心理研究』七冊で、これはわたしにとつての啓蒙の書である。讀めばたちまち眼から鱗が落ちた

ように思い、人生と社會について一種の見解ができた。⁽¹¹⁾

と言うように、エリスのこの書は周作人の思想に決定的な影響を與えたのだ。⁽¹²⁾

一八五九年イギリス南東部クロイドンに生まれ、一九三九年に亡くなったヘンリー・ハヴロック・エリスは、醫者でありながら文明・文藝批評家であり、そして性心理學の開祖のひとつりという多才な顔を持つ。彼は一八九六年『性的倒錯の研究』をヴェイクトリア朝の性抑壓の風潮遺る母國イギリスで出版するものの發禁處分の憂き目を見、ドイツで再出版、その後アメリカで發表、一九一〇年までに『性の心理研究』——*Studies in the Psychology of Sex* 全六卷七分冊を完成させた。初版は一八九六年から一九一〇年にフィラデルフィアの出版社 F.A. Davis から發行され、一九二八年になって補遺の意味合いを持つ第七卷が出た。周作人が、生涯心酔することになるこの書をいつ、どこで手にしたのかについては、實はその痕跡ははっきりとは遺されていない。しかし、一八九〇年に出版された『The New Spirits』から一九三四年の *Questions of Our Day* までのエリスの著作はすべて丸善から買っていると語ることと上記の回想から推測するに、おそらく、留學も終りに近づいた一九一〇年から十一年にかけての或る日、出たばかりの『性の心理研究』を丸善の書架に見つけたのだろう。ちなみに、彼が最もよく引用する第六卷の初版が出版されたのは一九一〇年である。彼はのちにこうも語っている。「わたしは英語を學んでも、シェークスピアを讀むでなし、なんら使い道もなかったが、エリスの原著を讀むことができるようになったときにはじめて、南京の英語班で勉強した何年かの月日が無駄ではなかったことを知った⁽¹³⁾」。

周作人が「性」の觀念に出會つたのはエリスによつてだつたようだが、『性の心理研究』が出版された前後には、これまで抑壓されタブーとされた性の領域に踏み込み、科學的に解剖する書がヨーロッパで續々と出版される。とくにクラフト・エヴィング *Psychopathia Sexualis* は、これまで「正常に、生産のために夫婦間においてのみ營むべき」とされた性愛からははずれる「異常愛」の數々——同性愛、フェティシズム、サディズム、マゾヒズムに光をあてる。¹⁶ この一冊が近代性科學の開拓の書になつた。¹⁷ 一九〇五年には、フロイトが、幼少時代の両親との關係がその後の性的感情と行動とを決定すると主張した「性慾論三篇」を發表する。

ヨーロッパで産聲をあげた性科學が日本に入つて來るのにその時間ばかりはかからなかつた。周作人が留學のため來日する十二年前、つまり一八九四年（明治二十七年）、日本で一冊の本が翻譯出版されている。その名は『色情狂編』、エヴィングの *Psychopathia Sexualis* の初譯である。以來、學問的なものもいかがわしいものも含めて、日本でも數多くの「性科學書」が翻譯され、また著述される。¹⁸

エリスの書物の翻譯は當時の日本では以下のものが知られている。*Man and Woman* は一九一三年（大正二年）に小倉清三郎が『性的特徴』として翻譯、丁未社より出版された。周作人が傾倒した *Studies in the Psychology of Sex* は一九二一年（大正十年）鷲尾浩によつて『性の心理』全十冊として冬夏社より發行、また一九二七年（昭和二年）にも著者の譯者宛書簡を附して、増田一朗の手によつて翻譯がなされ、日月社より全二十巻が出版されている。フロイトの精神分析學が翻譯という形で日本において一般的にひろく知られるようになるのは大正の末のこと、安田徳太郎翻譯の『精神分析學入門』をはじめと

たいまつの照らすもの

したフロイト全集が刊行される。¹⁹

わたしたちがいまごく普通に用いる「性慾」ということばであるが、これは明治二十九（一八九六）年に森鷗外が『つき草』敍で用いたのが最初であるとされる。²⁰ 醫師であつた鷗外は、當時ヨーロッパで興つた性科學の言説にも幅廣く目を通した。そして自らの性を省みて書いたのが「キタ・セクスアリス」である。この「セクスアリス」ということばが *Psychopathia Sexualis* を踏まえていることは言を俟たない。「キタ・セクスアリス」は一九〇九年（明治四十二年）七月一日發行の雑誌『スバル』に發表されたが、たちまち發禁處分をうけた。

周作人は一九二八年にこの作品を翻譯している。彼は岩波より出版された『鷗外全集』は持つておらず、ためにこの一篇がそこに収録されていくかどうかを知らないと言ふ。彼は發表當時の『スバル』に據つて譯出したのだつた。²¹ 周作人が、エリスよりも以前に他の性科學の書を手にしていたかどうかは判然としない。しかし「目から鱗が落ちる」よりも前に、エヴィングからの流れを汲む「性科學」によつて興つた日本の「性的告白」に出會つていたことは、このことから窺い知れる。

だが「キタ・セクスアリス」掲載の『スバル』を發刊後しばらくして手にはしていたものの、翻譯するのはおよそ二十年経つてからのことである。當時大町桂月からは、「西洋に例あるか否かは知らざれども、我國にては、古來、その類を見ざる小説也」と評され、「性慾に關する經歷を自から傳」した「キタ・セクスアリス」は當然周作人にとつても衝撃的であつたに違いないが、鷗外のこの作品は、ドイツの性科學と個人的體驗を基にしているとはいへ、假構の小説であり、同じような經驗を共有したとしても周作人の人生觀やそれまでの性觀念

をくつがえすほどのきつかけになつたかどうか定かではない。彼が鷗外の「性慾史」を評價するのは、やはり西洋の性科學による直接の洗禮にあつてからだろう。同様に、周作人は、日本における性科學の移入と盛行はよく知つていたと思われるが、そうしたものから具體的どの程度の影響を受けたのかはまだ明らかではない。たとえば、エリスの『性の心理研究』において言及されるフロイトの説を讀んでいたのは勿論だが、フロイトの書そのものを日本語譯で讀んだのか、英譯であつたのかはまだ分らない。

闇そのものであつた性の正體は、近代の訪れとともに明らかになりはじめる。性科學がそれを説明していつたからである。

三、「授乳」の意味

周作人は晩清の浙江省紹興に、没落讀書人の家庭の次男として生をうけた。「わたしの誕生は極めて平凡、なんら目新しい珍しいこともなく、悪い兆候もなかつた」と晩年の周翁は『知堂回想録』「二、老人轉生」にて語る。ここでは、つぎのような思い出が語られている。

わたしは十歳になるまえ、病氣がちであつた。もう記憶もないし、漢方醫の言い方はどれも奇怪だつたから、食裏火か火裏痰であつたかはつきりとは言えぬ。しかしそのなかでもいちばん酷かつたのが、母は乳が出なかつたので、乳母を雇つたのだが、この乳母もともと乳などなかつたことだ。こどもが泣かぬよう、門口でいろいろなものを買つてきては與え、結果として當然のこゝと消化不良を起こし、死にそうなほど痩せこけていた。しかしどうやら餓鬼の病に罹つたようで、目に入るものはなんでも食べた

がつた。對症療法として、大人たちは何も食べさせなくなり、ごはんと鹽漬けのアヒルのたまご——これがおきまりの療養食の唯一のおかずであつたのだ——それしか食べさせてもらえなかつた。こういう類の病に罹つたこどもにしてみればきつと苦痛なことであつたらう、だがわたしはまったく覺えていない。それは感謝すべきことである。ただ本家の年配者がときどきこう言つていたのを覺えているだけだ。

「二阿官のときの食事はかわいいそんなもんだつたよ。ごはんのたんび、茶碗一杯のご飯に、鹽漬けたたまご四分の一、それをわたしんとこの窓のしたで食べてたもんさ。」

彼女がこの話をしてくれたことに、わたしはどうしたつて感謝しなければならぬ。彼女の同情の口吻のうちには、何やら悪意が潜んでいたかもしれないが、というのも彼女は人をそそのかして間を裂くのが得意だつた——ほかでもない——つまり魯迅が『朝花夕拾』に描いた「衍太太」そのひとだつたのだから。

周作人は、まだ乳を必要とする嬰兒に固形物をあてがうような、意味なひとびとに圍まれた地に生まれ落ちた。近代以前の、舊社會の闇に包まれた幼少期であつた。このエピソードはそのことを物語る。しかし、それこそがのちの彼を形成する「感謝すべき」過去になる。

このことについては他にも話が残っている。魯迅が周作人と喧嘩別れして北平西城區八道灣から磚塔胡同六十一號に移り住んで後、彼の隣人となつた紹興出身の兪芳は魯瑞——周氏兄弟の母親からつぎのような話を聞いている。

周作人のことに話が及ぶと、彼女は残念そうにこう話してくれました。老二が生まれたあと、彼女は體の具合が悪く、お乳も足りなくて、乳母を雇ってくるしかありませんでした。思いがけもせず、來てもらった乳母のおっぱいも出が悪かったのです。後で分かったのですが、この乳母、老二のところに行くまえにもうひとり赤ん坊に乳を飲ませていたのですね。薄いお乳では、老二は満足せず、老二が満足しなくて泣いたり喚いたりするのを恐れて、こっそり菓子を買って腹の足しにさせていたのです。そうすると、一歳にもなっていない老二は胃腸を悪くし、見るもかわいそうな程やせこけていましたね。斷乳しても、老二の體は弱くて病気がちでしたけど、食べることに貪欲で、目にはいったものすべて口に入れたがって、まるで食べても食べても満足しないようでした。醫者は、これは乳不足だと言っていました。餓鬼の病だという老人もいて、ゆっくり養生して、腥ものやおやつを食べさせず、毎食半膳しか食べさせるなつて。ですがそうすると、もっとひもじくなつて、もっと痩せていったのでした。

周作人が愈芳同様、母魯瑞から直接このはなしを聞いていたかどうかについては、確かめるすべはない。しかし、すでに忘却の彼方、その影すらとどめぬひもじさに泣く赤ん坊の頃の原風景は衍太太の話で、周作人の眼前に現出する。愈芳のはなしでは乳母からまったく乳を貰わなかつたわけではなかつた周作人であるが、彼自身が遺した唯一の回想では、乳はまったく貰えず固形物を與えられたと、その「體験」は書き換えられている。

幼少期に感じたひもじさは、大きくなるにつれて忘れてしまった――

たいまつの照らすもの

―ところが、衍太太のことばによってよみがえった「ひもじさ」は、彼が幼児期にしかるべき愛情を受けなかつたという自己像を形成するうえで、決定的なはたらきをすることになる。

それはただ「乳」や「食物」といった物質による飢えだけだつたらうか。他の兄弟にあつて自分自身に齎されなかつたものは何であつたらうか。自らをのちに「醜いあひるの子」であつたと述懐する彼だが、その自己卑下は幼少期のこういつたコンプレックスが基となつてゐることは想像するに容易い。自分には何かが足りないという感じ拭えなかつたのだらう。しかし舊い紹興の家にいた當時の彼は、もちろんその「何か」に輪郭を與える術すら持たない。

だが、その周作人の原風景をたいまつが照らす。

一九〇三年に『性の心理研究』第二巻として刊行された「愛と苦痛 性的衝動の分析」でエリスは、「性本能」とは異性ととの行爲において満たされるまつたく神祕的な現象であるとしたエドワルト・フォン・ハルトマンの説に對し、つぎのように主張する。

しかし、性的行爲を單なる放出の過程として考えることは、この不思議な現象について何一つ説明していない……そうした關係は實際に乳を吸わせている母親と乳を吸っている子供の場合に明らかに存在している。母親は自分の膨らんだ乳房を心地よく和らげているために子供の恩恵を受けている。そして文明社會においては、その他のより微妙な喜びと知的な省察が働くので、授乳という行爲にとつて缺かすことのできない強力な、肉體的な快樂の意義は多少減少するが、動物においても、より原始的な社會においてもこの快い肉體的な満足の要求は母親とその子供の間の眞の

絆なのである。授乳と性交はきわめて類似している。勃起した乳首は勃起したペニスに相當する。乳首を切望している子供の濡れた口唇は、濡れて痙攣している臍に相當し、生氣を與える蛋白質を含んだ乳汁は同じように蛋白質を含んだ精液に相當する。そして準備された貴重な液體が一方から他方へと流れ移ることによって味わう母親と子供の肉體的、精神的な不完全な満足感、性行爲の絶頂における男女の關係と全く生理的、心理的に類似している關係である。しかし、この密接な類似でさえ性生活のあらゆる事實を説明し盡くすものではないのである。

また、一九一〇年に出た同書第六卷『性と社會』「第一章 母と子」にはつぎのような一節がある。

母親が健康である限り、母親と子供の關係を充分に充實させるために子供に母乳を與えなければならぬ。……子供が母親の胸に抱かれて母乳を吸わなければならぬ理由は、人々が考えるよりもはるかに重大なのである。第一に、心理上の理由が重要である。微妙な、敏感な乳房を備え、性的器官と調和して働く乳房は、その機能を働かせて母性愛を發達させる。言うまでもないが、自分の子供に乳房を與えたことがない女性であつても、その子供を愛することには變わりはないであらうが、しかし、そうした愛はしばしば根本的な本能の側面に何か缺けている場合がないではない。世間には異常と言うほどではないが、あまり子供が好きではないし、子供も懐かない女性がいるが、そうした女性でも自分の子供に授乳すると途端に母性愛に目覺めることがある。母

親は子供を自分の母乳で育てるべきであるという理由は、常識的に考えても、母親が健康である限り、母乳は嬰兒にとって唯一もつとも適した食物だからである。

世の中には科學の信奉者がいて、母乳と同じあるいはそれ以上の食品を人工的に製造することが可能であると信じている人々がかなりいる。また、嬰兒にとってミルクは決して母乳に劣らない最適な食物であると信じている人々も少なくはない。しかし、そうした考えは妄想に過ぎない。嬰兒の最上の食物はなんと云つても母親の身體の中でつくられた食物である、その他にも多かれ少なかれ母乳の代用となる食物がないではないが、面倒な手間がかかるばかりではなく、それ以上に、母乳であれば決して心配する必要がないさまざまな危険が伴うことを忘れてはならない。さらに、特に下層階級の人々の間には、嬰兒の周圍の人々が、自分が食べられるものであれば嬰兒も食べられるし、結構滋養になると考えて、まるで嬰兒を實驗臺のようにみなして何でも食べさせる傾向がある。そのために、パン、馬鈴薯、ブランドー、ジンマデが嬰兒の口の中に押し込められる。母親の乳房を與えられている嬰兒には、醫師の指示がない限り、どのような食物も一切與えるべきではない。母親が子供を自分の母乳で育てるべきであるという理由のもつとも重要なものの一つは、何と云つても、母親が授乳することによって、終止子供と接觸し、密接な關係を保つことができるという利點である。

エリスが母乳の必要性を強調する背景には、それまでのヨーロッパ、特にブルジョワ階級における母性の放棄があつたことに言及して

おかなければならない。彼女たちは、ダンスをする時間を惜しみ、うつくしい乳房の形が崩れることを恐れて、生まれた子どもを農村に遣り、乳を與えることをしなかった。農村に遣られて乳母の乳を充分に與えてもらうことの出来たことも「奇跡」的であり、農村へ向う途中で死亡するものも多かった。そうした上流階級の風潮に對しルソーは自然回歸を唱えたが、エリスがこれを書いた十九世紀になると、下層社會においてすら母性の放棄が行われていた。彼が授乳による母性愛提唱を説くのはこうした背景がある。しかしエリスはそこに、授乳する乳房それ自體が「性的器官と調和して働く」點を付加した。エリスの功績は、羞恥心の心理を解明したこと、精神病の原因とされてきたマスターベーションを正常な行爲であるとしたこと、フロイトの精神分析がまだ世に知られていなかった當時、フロイトの見解に理解をしめたこと、さらには當時の誰よりも、社會を支配していた家父長的態度を變化させるために大きな働きをしたということが擧げられる。しかし、この母と乳兒の關係からもみられるように、エリスは授乳という「母親」としての行爲にも、「女性」の性的側面を認める。

フロイトは一九〇五年、「性慾論三篇」中「對象の發見」のなかでエリスの「性的衝動の分析」中の記述を擴張して、彼獨自の論を展開する。思春期、勃起するようになった男根は突進していくべき性目標を示すが、心的な側面から見ればごく幼い時代からそのための準備が行われてきた對象の發見が成就する。そして、「性愛の満足が榮養の攝取と結びついていたときには、性の慾動は性對象を自分の身體以外の母の胸に求めていた。それがこの對象を失ったのは、のちになつてからのこと、おそらくは、満足をあたえてくれる器官をもっているひとなつての全體的表象を形成することが子供心にできるよになつ

た。いまつの照らすもの

た、ちようどそのころのことであろう。……小兒が母の乳房を吸うことがあらゆる愛情關係の原型となつてゐるのは、十分な根據のないことではない。對象の發見ということは、本來は再發見なのである」と述べる。

フロイトは、嬰兒の健康維持という面、そして彼らを健康的な人生に導くための母親の愛情を増幅させるだけではない、子どもの「性」の萌芽になる授乳という行爲に、子どもの側から特にその意義を見いだす。わたしたちが長じて初めて知つたように感じていた性と愛は、この世に産聲を上げた時すでに始まつていたのである。「榮養の攝取から性的活動が分離したのちにも、あらゆる性的關係のうちのこの最初でしかもつとも重大なものなから、ある重要な部分があつに残るのであつて、これは對象選擇の準備をする、というのはつまりあの失われた幸福を再建するのに役立つのである。幼兒は潜在期を通じて、自分を無力な状態から助けだし、自分のいろいろな要求を満足させてくれるひと、つまり自分を愛してくれる他の人物を知るようになるのだが、それはまったく乳母に對する乳兒の關係を手本としており、またその繼續なのである。」

母乳の必要性を説いたエリス、そしてその論を授けとしながら、両親からの愛情、とくに最初に出會うべき異性——母という異「性」が脱落することが、ひとりの人間の後々の人生に少なからぬ影響を與えることを論じたフロイトの存在を知り、彼らの「性科學」「性心理學」によつて、周作人は自分の幼少期をより論理的に認識し、自分の「傷」を確信する——ただしこれはおそらく五四時期以降、一九三五年頃までに獲得した認識であろう。いまはエリスに戻ろう——エリスの「性の心理研究」を讀んで、それまで混沌としていた缺如感が「性」的な

ものであることを識り、「眼から鱗が落ちた」のである。衍太太から聞かされて後抱いていた名付けようのない缺如感、解けない謎が解けた瞬間である。

エリスのたいまつは前を照らすものであった。だが周作人にとって、それはまず、自分の過去を照らすものであった。これはいわば、「後ろ向き啓蒙」である。ひとりの人間における思想の受肉のひとつの典型として、周作人を考える場合、大きな意味をもつとわたしは考えるのである。

周作人は聞かされた「體驗」をもとに自己像を再構成する。おそらく、彼はここで、自らのアイデンティティを獲得したのである——自分の過去を「過去」と了解したことによつて。意識の上ではすでに「忘れてしまっていた」ことを教えてくれた衍太太に「感謝する」のはそのためである。と同時にエリスのかざした燈によつて、蒙昧という闇に包まれた周作人自らの「性的」幼少期における「缺如」という傷の意味は明らかになった。ヨーロッパに生まれたエリスの近代的性科學、性心理學の思想は、周作人の體驗と溶け合い、自分のものになる。彼は結婚のおよそ三年後、一九一二年五月に長男豊一を得る。周作人が兒童關係の文章を書き始めるのは一九一二年、兒童關係、教育關係の本の購入がはじまるのは、現存する日記をたしかめると、同年十月からである。周作人が兒童に注目するのは、實生活で子どもを得たこともひとつの大きなきっかけになっているのは確かである。だが、自分のこどもの誕生を契機にして兒童の養育、教育に目を向ける過程で、ハヴロック・エリス『性の心理研究』の持つ大きな意味を理解する。目から鱗が落ちたのである。つまり自分のこどもを契機にして、周作人はこどもであつた自分を發見したのだ。彼が生涯を通じてこど

もの「存在」を認め、彼らが人間らしく扱われることを主張することには、一家のこどもたちの和氣藹々とした情景に寄り添うように、紹興の暗い窓のした、ひもじさに腹をすかせて泣いていたこどもの自分の影がある。これこそが周作人にとっての、本當のこどもの發見ではなかつたか。

こどもにとつて最初の愛情となり得る「授乳」。その授乳の必要性に、當事者である母や乳母といった女性すら氣づくことさえ難しい、社會全體を覆う無知。そして母という最初に出會うべき異性の缺如。したがって當然得らるべき愛情の缺損。こうしたこと、エリスによつて周作人は氣付かされる。周作人の女性とこどもの「發見」は、再架構された「自らの經驗」と社會への反省からきているのだと考えられる。彼はその經驗と反省をもとに今度はエリスから受け取つたたいまつを中國の荒野にかざし、人々に行くべき道を照らした。それが、五四のヒューマニズムの聖典、「人間の文學」である。

近代精神や文學が獨立した個人の内省や悔恨から生まれたとするならば、周作人の回想録の記述（前出）は鷗外のような文學作品としての形式はとらないものの、そこで述べられた體驗は彼をひとつの近代精神、近代的思想に導く。つまり、周作人による人間の發見——女性とこどもの「發見」から成る「人間の文學」はこの傷の認識により誕生したのである。「人間の文學」において、「性的生活があればこそ、自ずと生命の延長と哺乳の努力があるわけで、これは動物であればみなそうである。それが人類になると、戀愛による男女關係、自我の延長については、より意識的なものになって、親子の關係はとりわけ深く濃くなる」と書いたのは、エリスの論説を周作人なりに消化し、凝縮したのである。

女性が男性の隷屬物として扱われることに對する批判、「戀愛による結婚」を主張することについては、祖父のもと虐げられた祖母、そして初恋の相手鄺永平——結婚後病を得てもろくな治療も受けられず落命した——彼女たちの影がある。「親子の愛」の主張は、幼いときに自分が得られなかった母性の愛——衍太太として一族の人々から聞かされた話を、エリスから得た新たな認識に據つて自己像を再構成した周作人自身の「原體験」からきていると考えていい。これらの「發見」は、實は、彼の成長期における極めて個人的な經驗であると同時に、舊社會に育つた無数の小さき周作人たちの經驗を背景としてるのである。

周作人はこうしてこどもを發見し、同時に母性（最初の性）、そして女性を發見したのであった。そして、その女性の發見はまた新たな「性」——人間そのものの發見だったのである。

性は愉樂的快感を貪る雄と雌とのたんなる「妖精の取っ組み合い」にとどまらない。こども時代、母に抱かれその乳房を含まされて感じたるの、すでに忘却の彼方の「愛」と「快感」は長じて「性」となり、それはこの世に生まれ落ちて死ぬまでを包括する「人間」という「性」を形成する。性は、そのひとの一生を規定する。性そのものの、それこそが生そして死——人間の一生なのだということ周作人はここで理解したのである。彼は、ヨーロッパの最先端の性科學を近代思想として自己のものとしたのである。そして、この個人的體験こそ、一般的な時代思潮と見られがちな彼の五四啓蒙思想を裏打ちするものであった。

四、五十自壽詩

一九三四年一月、五十の齡を迎えた周作人は二首の自壽詩を書いた。その内の一首は、

前世は出家今は在家、袍子を袈裟に換へもせず。街頭終日鬼を談ずるを聴き、窓下通年蛇を畫くを學ぶ。老い去りて端なくも骨董を遊び、閑來分に隨ひて胡麻を植う。旁人もしその中の意を問はば、寒齋に到りて苦茶を吃せよ。

もちろん打油詩であり、モチーフとなつたのは、「前世は出家今は在家」——彼の誕生に纏わる話として遺る迷信めいた舊い話である。周作人は『知堂回想錄』冒頭の「二、老人轉生」でこう語る。堂房の阿叔は酒に酔うて歸宅し内堂に入る際、醉眼朦朧の眼に白鬚の老人が見えたような氣がした。周作人が生まれたのはその晩のこと——たぬに彼はこの白鬚の老人、轉じて「老和尚」の生まれ變わりと言われることになつたのだ、と。要するに、周作人はこの話を聞いた時點で、自分がすでにふつうの「こども」ではなく世間知をもつた人間として運命づけられているという自己像を形成してしまつていたのである。この詩はそれを再確認したものである。つづいて語られる「授乳」の話同様、「こども」であることの缺如を周作人自身が認識していたことを示すエピソードである。打油に紛らわせていながら、自身の過去についての重要な彼自身の認識を私たちに差し出しているのだ。そのことについては、周作人が同年末に提示することになる自述補注の文章に照らし合わせてみれば明らかである。

一九三四年末に北新書局から上梓された陶明志編『周作人論』冒頭の「周作人自述」、それ自體は一九三〇年に書かれ、「讀んだ書の中で彼に最も影響を與えたのは英國エリスの著作である」の文で締めくくられている。補注全文はつぎのとおりである。

以上は民國十九年に『燕大月刊』のために書いたものである。

いまひとこと付け加えてもいいだろう。もしもフロイト派の児童心理が分かなければ、彼の思想態度を批評するに、どんな言い方をしようとも、まったくとるべきところはないし、まったくの徒勞である。 民國廿三年末^③

フロイト派の児童心理——人間の心理と性との關係についてはよくから認識していたフロイトであったが、十九世紀末のウィーンでは性のはなしは口にするさえタブー、口にすればそれは酒場の笑い話程度で済まされるものであった。しかし彼はイギリスで發表されるエリスの一連の性心理研究を知り、自分の同志を見つけたことを喜び、敬意を表しつつ發表したのが一九〇五年の「性慾論三篇」であった。フロイトは言う、「このような見解が「亂暴だ」と思われるひとは、ハヴロック・エリスが母と子の關係をほとんど同じように取り扱っているのを讀まれたい^④」。そのエリスの説とは前に引用した「性的衝動の分析」の項である。フロイト派の児童心理とは、周作人と關連付けるならば、この「性慾論三篇」を指す蓋然性が高い。勿論フロイトにはこのほかにも児童心理に關する論文は數多い。フロイトとエリスとの關係から見て、「フロイト派」と周作人が言うのは、廣義に考えるとエリスをも含む。フロイトの「性慾論三篇」の英譯は一九一〇年に

Three contributions to the sexual theory (Authorized translation by A.A. Brill: with introduction by James J. Putnam—New York: Journal of Nervous and Mental Disease Pub. Co.) として出版された。日本語譯はすくなくとも、一九三一年に矢部八重吉が「性慾論」(春陽堂／精神分析學研究所編『フロイド精神分析學全集』)として譯出したものが確認される。しかし、前述したように、周作人にはフロイトについて表立って言及した文章がないため、彼がどの程度フロイトの著作を讀んでいたかは分からない。

ともかく、「論争」という時事的な事件に觸發されたとはいえ、五十の齡を迎えた周作人は、自己の半世紀にわたる過去を振り返り、自分の生涯、存在、生き方への了解・理解は、フロイト派の児童心理が分からなければ意味がないと言いつつ放った。彼はこの數行で以て自分の在りよう、それに對する自己了解の根底にフロイト派の児童心理があるということを告白したのだ。この數行は、彼の生涯や文學にまつわる様々な問題への連想を誘うが、今は措くことにする。

五十自壽詩が同年二月『現代』第四卷第四期、四月『人間世』第一期に掲載されると、兩極の反應が起きる。周とともに五四の黎明期を思想的啓蒙者として支えあつた、蔡元培、沈尹默、錢玄同、林語堂、劉半農はこれに和する詩を『人間世』に發表する一方、左翼青年たちの反論が巻き起こる。まず埜容(廖沫沙)が四月十四日『申報』副刊「自由談」に「人間何世?」を書いて非難の先鋒をきる。繼いで胡風が十六、七日付『申報』副刊「自由談」に「過去の幽霊」、許傑は七月『文學』に「周作人論」を書く。彼らは周作人がすでに過去を振り返るだけの人間になってしまった、新しい衣裳を着た士大夫だと烙印を押したのだった。論争のあらましについては錢理群『周作人傳』

「第七章 苦雨齋の老人 五、五十自壽詩」を参照。⁽⁴²⁾

周作人自身は彼ら「ユーモアを解せぬ若い友人たち」の反應に對し、別段抗議をしなかった、と當時周と親交のあつた松枝茂夫は語る。しかし、續いて松枝氏は言う。「ただ『周作人自述』(一九三四年)の最後の數行を以て彼の回答であるとすることは可能であらう」⁽⁴³⁾。當時の狀況から推測すれば、松枝氏の説は首肯するに足る。

周作人の打油詩と性科學への理解に對する左翼青年たちの攻撃は、攻撃する對象への最低限の理解もなく、兩者の立脚點もまったく違う、さほど意味のないものだったと思うが、周作人にこの一文を書かせるに至つた彼らの「戦果」は充分褒め稱えていい。これは、周作人の生い立ちから今に至るまでの自己解剖、わたしたちが彼自身を解くことのできる秘密の鍵の在處である。許傑に「淺薄な人道主義」だと斷ぜられた周作人の人道主義の結實「人間の文學」は、じつは自身による幼少期の傷を抉る自己認識、自己解剖という個人的な過程を辿り生まれたことは、すでに述べた通りである。許傑の批評は、そうした周作人の近代思想への完全な否定であつた。それに對して周作人はこの一文で以て反撃したのである。自己についてはほとんど直接的には何も語らない周作人が、つばやくようにではあるが同時に、彼にしては大膽一撃の口吻でこの補注を書いたのはそのためである。

ただ、左翼青年たちの攻撃にも理がなかつたわけではない。それはこの一文が端的に示すように、周作人があくまでも自分の過去に固執してしかものを言わぬその態度である。ここには五四の「人間の文學」におけるような、廣く未來を照らす展望を持ったたいまつたいまつの光はない。あるのは周作人自身の閉ざされた過去、彼がいま閉じこもる苦雨齋の中を照らす光のみである。性科學の啓蒙運動に関わり、それを

たいまつたいまつの照らすもの

提唱するという姿勢はまったく見られない。しかしそれは十分豫想しうることである。なぜなら五四の挫折後、大病を経て、彼は『自分のたけ』を書き、「閉戸讀書論」を書き、啓蒙から身を引いたのだから。彼にいま残るのは、自分のことも時代の發見というあまりにも個人的な過去を照らすたいまつたいまつの餘光、自己の觀照という態度である。詩に關して周からの直接的な應酬はなかつたものの、胡風と周作人のあいだでは別の「論争」が起こつた。それが、ハヴロック・エリスをめぐる論争である。

一九三五年一月胡風が『文學』に書いた「林語堂論」に對し、周作人が同月『大公報』に「エリスの時代」を發表、翌月今度は胡風が「エリスの時代という問題」を『文學』に、三月にも『太白』に「エリス・フランス・時代」という文章を寄せる。簡単に概括すれば、周作人の傾倒するエリスの隱士と叛徒の態度を評して「エリスの時代は過ぎ去つた」と言う胡風に、周作人は批判された自身の態度については何も觸れず、エリスは何の時代も打立てていない、もしその時代が到來する時があるとすればそれは両性が解放される時である、と皮肉たつぷりに應酬する。それに對して胡風は言う。「エリスが道德の世界において追求するものは本原的なものであつて當爲のものでなく、生物學、人類學、性學という科學的根據によつて一切の「タブー」の傳統的な偽善を一掃しようとするのであつても、いかんせん我々もはもう「猿人」ではなく、この血と肉をそなえた身體はすでに歴史的存在になつており、社會の發展の鐵則のなかにすべての人間關係の根源を求めなければならぬ」、「たいまつたいまつを受け取つても、五里霧中に迷うだろう」と。⁽⁴⁴⁾

兩者の論争の態度はかなり感情的なもので、くわえて胡風はイデオ

ロギー的な立場に立つてしか物を言わず、結果残りのないものになつてしまつた。これが、一九三四年末から一九三五年三月のあいだに起こつた論争の顛末である。

この不毛な論争の背景にあつたものとしてはつぎのようなことが考えられる。ひとつには、中國において少なくとも千年來、表立つたところでは性のことは口にごさへ憚られるという、性に對する儒教的なタブーが社會全體を呪縛していたこと。また、當時の知識階級における性科學に對する認識の低さ——中國では、エリスの『性の心理研究』は一九四〇年になつてようやく、潘光旦による翻譯が出版されるが、それも全譯ではなくアメリカで出たスチュエントエディションを底本としたものであつた。エリスを讀んでいないと自ら告白する胡風である。彼は性科學を單なる自然科學としか捉えていない。性科學は知識人の中でも「枕草紙」と同じレヴエルのものと考えられた可能性がある。例えば、一九三四年、『京報副刊』の記者が、ドイツの性學の大家ヒルシュフェルトと張競生を同列に論じたのを周作人が批判したように。くわえて、周作人自身のデイレットタント性にも問題がある。彼は中國におけるエリスの最初の理解者であり、性科學紹介の草分けと言つてよい人間であるが、自身が性科學を系統立てて紹介したことはないし、性的啓蒙を積極的に推し進めたわけではなかつたのだから。もうひとつには當時のマルクス主義によれば勞農階級の闘争によつて新しい社會が到來するという、胡風たちの信ずる思想——マルクス主義信仰を至上とするばかりで、他の思想を受け入れない「狭さ」、性科學をブルジョワ思想として排除するだけでまともに取り上げようとしなない、つまり中國のマルクス主義者たちの思想的貧困も理由として擧げられるだろう。そういう中で感情過多でイデオロ

ギー的立場の濃厚な論争では、何の餘りも得られなかつたのは、當然と言へば當然だろう。

フロイトの時代はともかくとして、エリスの時代も、周作人の時代も、かりに到來したことがあつたとしても、まだ完全に過ぎ去つてはいない。彼らが見いだした性を根源とするヒューマニズムは古びるところか、中國では現在でさえ新しいのではないか。周作人の掲げたたいまつは果たして誰に受け繼がれただろう。それを掲げて走り出した者はいただろうか。

最後に

性はなにも性セックス——成熟した人間同士の、オルガスムスを主體とする「妖精の取っ組み合い」、肉體的交媾というセクシュアリティの範圍のみにはとどまらぬ。性とはわたしたちを形成する自己、つまり個性個性であり、生きることそのものであつて、たんにセックスという愉樂行爲の「點」で終わるものではないのだから。

愛されぬということは、誰であつてもつらい。まして幼児期——己の意識のない最初の時代の愛の不在を確認するのは胸を抉られる痛みが伴うだろう。その愛は、これから出逢うかもしれないぬひととの愛を育む土壤になるのだから。こども時代に受けた傷——周作人の世代以前には誰も氣付かなかつた傷であるが——に氣付かなければ周作人は前へすすめなかつた。でなければ、近代中國の夜明けである五四を照らしたたいまつひとつは、火が點ぜられぬままだつた筈である。

フロイトは言う。「ある傳記を精神分析的に取り扱うさい、幼年時代のごく初めのころの記憶の意味を上述のような方法で解明してみるかならず成功する。そうするとたいいていの場合、分析される者が眞

先に話し出す記憶、彼が人生告白を始めるきっかけとして使う記憶は、すなわち彼の精神生活の秘密の抽出しを開ける鍵の納われている記憶、つまりもつとも重要な記憶であることがほどなく證明される」と。この言に従えば、一九三四年の五十自壽詩と「もしもフロイト派の兒童心理が分からなければ、彼の思想態度を批評するに、どんな言い方をしようとも、まったくとるべきところはないし、まったくの徒勞である」という「自述」補注の一文に繋がる『知堂回想録』冒頭のふたつの回想——それはどちらも「ごども」の缺如の記憶である。生まれ落ちたときから「白鬚の老人」「老和尚」、そして乳さえ與えられなかつたと語るのだから——は、核心を滅多に語らぬ、沈痛を幽閑に寄せる術に長けた周作人自身が提示した、彼のセピア色に翳んだ自畫像とでもいえようか。

注

- (1) Roback, A.A. "Sex in Dynamic Psychology."
SEX IN CIVILIZATION Ed.V.F. Calverton and S.D. Schmalhausen
with an introduction by Havelock Ellis: Garden City Publishing
Company, 1929. 145. "The revolt of the prophet marks this monumental
labor, which may be regarded as an encyclopedia on sex matters."
(2) ハヴロック・エリス『性の心理』「序」(ハヴロック・エリス 佐藤晴
夫譯『性の心理 vol.1 羞恥心の進化』未知谷 一九九六年 五頁)
(3) (2) の注に同じ。
(4) ハヴロック・エリス『性の心理』「後記」(佐藤晴夫譯『性の心理 vol.6
性と社會II』三四六頁) このことばはまた、一九九〇年にハヴロック・

エリスが、ハイネ、イブセン、トルストイ、ホイットマンについての論
考をまとめた *New Spirit* の題詞にもなっている。

- (5) (4) の注に同じ。三四五頁
(6) 周作人「人の文學」(一九一八年十二月刊『新青年』五卷六號掲載)『藝
術與生活』所收／鍾叔河編『周作人文類編』◎本色——文學・文章・文
化』湖南文藝出版社 一九九八年 三十一—三十九頁)「因他本來是天
性的愛、所以用不着那些人爲的束縛、妨害他的生長。……照生物現象看
來、父母生子、正是自然的意志。有了性的生活、自然有生命的延續、與
哺乳的努力、這是動物無不如此。到了人類、對於戀愛的融合、自我的延
長、更有意識、所以親子的關係、尤爲深厚。」
(7) 魯迅『墳』、ほかに『熱風』「隨感錄二十五」(『魯迅全集』第一卷所
收 人民文學出版社 一九八一年) など。また周作人の新詩「對於小孩
的祈禱」(『過去的生命』所收 周作人自編文集 河北教育出版社 二〇
〇二年) をも参照。
(8) 舒蕪「導言」(『女性的發現——知堂婦女論類抄』文化藝術出版社 一
九九九年 一一—五十五頁)
(9) 周作人「東京の書店」(懷東京之二)(一九三六年十月刊『宇宙風』二
十六期掲載)「瓜豆集」所收／鍾叔河編『周作人文類編』◎日本管窺—
—日本・日文・日人』七十七頁)「說到東京の書店第一想起的總是丸善
(Maruzen)。……一九〇六年初次看見的是日本橋通三丁目的丸善……
我在丸善買書前後已有三十年、可以算是老主顧了、雖然買賣很微小、後
來又要買和書與中國舊書、財力更是分散、但是這一點點的洋書卻於我有
很極大的影響、所以丸善雖是一個法人而在我可是可以說有師友之誼者
也。」
(10) この時期の周作人と弱小民族の文學との關係については拙稿「深き淵

より——周作人「哀絃篇」論」(『颯風』第四十一號 二〇〇六年十一月 颯風の會發行三十八—七十二頁)を参照のこと。

- (11) (9)の注に同じ。七十七—七十九頁 「最重要的是藹理斯的《性心理之研究》七冊、這是我的啓蒙之書、使我讀了之後眼上的鱗片倏忽落下、對於人生與社會成立了一種見解。」

- (12) 周作人とエリスの關係について日本では、松枝茂夫「周作人先生の立場」(支那語學會編輯『支那語學報』創刊號 文求堂 一九三五年十一月)、『松枝茂夫文集 第二卷』研文出版 一九九九年 三—十頁)をはじめとして現在に至るまで多くの言及がある。

- (13) 佐藤晴夫譯『性の心理 第一卷 羞恥心の進化』(譯者まえがき) 七一—八頁 (未知谷 一九九六年)

- (14) (9)の注に同じ。七十九頁「藹理斯的著作自《新精神》以至《現代諸問題》都從丸善購得。」

- (15) 周作人「性心理學(我的雜學之十二)」(一九四四年七月十六日刊『華北新報』掲載、『苦口甘口』所收)／鍾叔河編『周作人文類編』⑤ 上下身——性學・兒童・婦女」二頁「我學了英文、既不讀沙士比亞、不見得有甚麼用處、但是可以讀藹理斯的原著、這時候我才覺得、當時在南京那幾年洋文講堂的功課可以算是并不白費了。」

- (16) 菅野聰美「『變態』の時代」(講談社現代新書 二〇〇五年)

- (17) 太田武夫「性科學」(『唯物論全書』昭和十二年 三笠書房)

- (18) 菅野聰美氏によると、大正二年にエヴィングの翻譯が『變態性慾心理』として大日本文明協會から出版されて二年後に羽太銳治・澤田順次郎「變態性慾論」が出ると、昭和十二年まではほぼ毎年、「性科學」(菅野氏がまとめたものは書名に「變態」と名のつくもののみ)の書が出版される。その中でも、羽太銳治、中村古峽、田中香涯、宮武外骨らの書

を、二十年代から三十年代にかけて、北京にいた周作人は丸善より取り寄せて購入している。

- (19) 太田武夫「性科學」第九章 日本における性科學とその將來 A 日本性科學概論」二四〇頁(『唯物論全書』昭和十二年 三笠書房)

- (20) 齊藤光「アンソロジー 明治期の性言説をめぐって」解説」(『近代日本のセクシュアリティ 6 (性)をめぐる言説の變遷』ゆまに書房 二〇〇六年七月 四—三頁)

- (21) 周作人「VITA SEXUALIS 譯者引言」(一九二八年六月—九月刊『北新』二卷十四—二十一號)／『周作人文類編』⑤ 上下身」一八九頁

- (22) 周作人「兒時的回憶」(一九三五年十月十三日『大公報』掲載)『苦竹雜記』所收／『周作人文類編』⑤ 上下身」六二—八頁

- (23) 大町桂月「鷗外の性慾小説」(明治四十二年八月『趣味』四ノ八掲載)／『鷗外全集』第五卷 月報五 岩波書店 一九七二年)

- (24) 一九三二年、森鷗外追悼のために周作人が書いた「森鷗外博士」のなかにも「キタ・セクスアリス」についての言及がある。(一九三二年七月二十六日刊『晨報副鐫』掲載、『談龍集』所收)『周作人文類編』⑦ 日本管窺——日本・日文・日人」二七—二七八頁

- (25) 周作人「知堂回想錄」二、老人轉世」(三育圖書文具公司 一九七四年 六頁)「我的誕生是極平凡的、沒有甚麼事先的奇瑞、也沒有見惡的朕兆。」

- (26) 以上、周作人「二老人轉世」(『知堂回想錄』注(25)に同じ。二—六頁)

「我在十歲以前、生過的病很多、已經都記不得、而且中醫的說法都很奇怪、所以更說不清是食裏火或火裏痰了。不過其中頂厲害的是因為沒有奶吃、所以雇了一個奶媽、而這奶媽原來也是沒有甚麼奶的；爲的騙得

小孩不鬧，便在門口買種種東西給他吃，結果自然是消化不良，瘦弱得要死，可是好像是害了飢癆病似的，看見甚麼東西又都要吃。爲的對症服藥，大人便甚麼都不給吃，只准吃飯和醃鴨蛋，——這是法定的養病的唯一的副食物。這在飢癆病的小孩一定是很苦痛的，但是我也完全不記得了，這是很可感謝的。只記得本家的老輩有時提起說：「二阿官那時的吃飯是很可憐相的，每回一茶盅的飯，一小牙（四分之一）的醃鴨子，到我們的窗口來吃。」她對我提示這話，我總是要加以感謝的。雖然在她同情的口氣後面，可能隱藏着有甚麼惡意；因爲她是挑拔離間的好手，此人非別，即魯迅在「朝花夕拾」里所寫的「衍太太」是也。*食裏火・火裏痰：中醫のことは、體に熱がこもること。

芥川龍之介も周作人同様、授乳が「Vita Sexualis」のはじまりになることに氣付いている。彼が一九二五年『中央公論』に發表した、未完の半自傳體小説「大導師信輔の半生——或精神的風景畫——」の第二節「牛乳」を參照。（『芥川龍之介全集』第七卷 岩波書店 一九七八年一七五—一七八頁）

(27) 兪芳「談談周作人」（北京魯迅博物館編輯『魯迅研究動態』一九八八年六月 四十一—四十五頁）「在談到周作人時，老人家不無遺憾地說，老二生下來後，由於她自己身體不好，奶水不足，只得請一位奶娘來喂養。沒想到，請來的奶娘，奶水也不大好。事後才知道，奶娘來喂養老二之前，已喂過一個孩子了。稀薄的奶水，不夠老二吃，又怕老二吃不飽，要哭要吵，就私下買些糕點給他充飢，這樣一來，不滿周歲的老二腸胃壞了，瘦得可憐。斷奶以後，老二體弱多病，但很貪吃，見甚麼都要吃，好像吃不飽似的。醫生說，這是奶癆。有些老人說這是飢癆病，得慢慢調養，忌吃葷腥、零食，每餐飯只能吃半飽。可是這樣一來，他更饑，更瘦了。」

たいまつの照らすもの

(28) 周作人「娛園」（一九三三年三月二十八日『晨報副刊』掲載『雨天的書』所收／『周作人文類編』⑩ 八十心情——自敘・懷人・記事（三十頁）「我本是一只丑小鴨」

(29) 中島長文「道聽塗說——周氏兄弟の場合」（中島長文『ふくろうの聲 魯迅の近代』平凡社 二〇〇一年 一五九—二四頁）

(30) ハヴロック・エリス著／佐藤晴夫譯「性的衝動の分析」（『性の心理 vol.2 愛と苦痛』二十五—二十六頁）

(31) ハヴロック・エリス著／佐藤晴夫譯「第一章 母親と子供」（『性の心理 vol.5 性と社會 I』三十一—三十二頁）

(32) エリザベート・バダンテール著／鈴木晶譯「母性という神話」（ちくま學藝文庫 一九九八年）

(33) ハヴロック・エリス 佐藤晴夫譯「譯者まえがき」（『性の心理 vol.1 羞恥心の進化』十一頁）

(34) フロイト「性慾論三篇 Ⅲ思春期における變態 對象の發見」（高橋義孝他譯『フロイト著作集』第五卷人文書院 一九六九年 七十七頁）

(35) フロイト「乳兒時代の性對象」（34）の注に同じ 七十八頁）
母と子の授乳を媒介とする接觸について、吉本隆明は兩者の説を巧く消化している。曰く、「乳兒の口（腔）と舌、もっている感覺（味覺）がそのまま性についての感覺（エロス覺）と融けあう理由は發生的にどこにもとめるべきか。このばあい、じかに性の感覺の對象になっているのは、母親の乳首だといっている。……乳兒が母親から乳頭を介して榮養を攝取する行爲は、そうしなければ生命が持續できない最小限度の本來的な榮養を攝取する過程だ。だが母親が環界のすべてであるような場で乳頭を口（腔）のなかに挿入し、乳汁を吸うという行爲で、受けいれるものと與えるものとの行爲の關係からみれば、内性器がもたらす内藏

- 感覺と外性器に擬せられる母親の雄性の乳頭と、雌性である乳兒の口(腔)と舌は、性行爲とみなすことができよう。乳兒はじかに乳汁を攝取する行爲において、性の行爲との同調をとげているのだ。」(吉本隆明「連環論」『母型論』學習研究社 一九九五年 二八—三十一頁)
- (36) 拙稿「或る女性の影——周作人の文學的出發」(京都大學中國語學中國文學研究室發行『中國文學報』第六九冊 二〇〇五年四月 七十九—一八頁)
- (37) (15) の注に同じ。一頁「妖精打架」
- (38) 周作人「自壽詩 其一」(王仲三箋注『周作人詩全編箋注』學林出版社 一九九五年 二八〇—二八一頁)「前世出家今在家、不將袍子換袈裟。街頭終日聽談鬼、窗下通年學畫蛇。老去無端玩骨董、閑來隨分種胡麻。旁人若問其中意、請到寒齋吃苦茶。」
- (39) 周作人「周作人自述」(陶明志編『周作人論』上海書店 一九八七年三月 二頁)「……所讀書中於他最有影響的是英國講理思的著作。」「以上是民國十九年爲《燕大月刊》所寫。現在可以加添一句，如不懂弗洛伊特派的兒童心理，批評他的思想態度，無論怎麼說法，全無是處，全是徒勞。民國廿三年末」
- (40) ピーター・ゲイ／鈴木晶譯『フロイト』第三章 精神分析(みすず書房 一九九七年九月 一六九頁)
- (41) (34) の注に同じ。七十九頁。
- (42) 錢理群『周作人傳』第七章 苦雨齋里的老人 五、五十自壽詩(北京十月文藝出版社 一九九六年 三七二—三七八頁)
- (43) 松枝茂夫「周作人先生」(松枝茂夫譯『周作人文藝隨筆抄』富山房百科文庫 昭和十五年 三二七頁、また『松枝茂夫文集 第二卷』研文出版)
- (44) 胡風「講理斯的時代」問題(一九三五年『文學』四卷三號掲載／『胡風全集』第二卷 湖北人民出版社 八十九頁)「無論他在道德的世界上所追求的東西是本原的而不是當爲的，想從生物學人類學性的科學的根據來廓清一切。塔布、傳統的偽善，但無奈我們已經不是。猿人，這個血肉的身子實際上已經成了歷史的存在，不得不在社會發展的鐵則里面尋求一切人間關係的根源。」「就是把那個炬火接到了手內，也會要迷失在五里霧里的。」
- (45) 潘が底本にしたのは以下の書。Ellis, Havelock: *Psychology of Sex: A Manual for Students*. London: William Heinemann Medical Books, 1933.
- (46) 胡風「講理斯的時代」問題(注(44)に同じ)
- (47) 周作人「性的心理」(一九三四年 北新書局本『夜讀抄』所收／『周作人文類編』上下身 一六一頁)
- (48) 「エリスの時代」など一連の文章を書いた胡風は晩年の回想録(「回憶錄」／『胡風全集』第七卷 二七三—七二頁)においてこの論争についてはおろか、周作人に關する記述もない。補注一文の引き金になった許傑も、その回想録(「坎河道路上的足跡」十二)、『新文學史料』一九八五年第四期 人民文學出版社 八十四—八十九頁)では周作人との論争については一節をもうけるが、性科學については觸れない。このことから、彼らにとつて「性科學」は論争當時にあつてもほぼ五十年後においても、まったく考慮の外であつたことが分かる。
- (49) フロイト『詩と眞實』中の幼年時代の「記憶」(高橋義孝他譯『フロイト著作集』第三卷 三一八—三二〇頁 一九六九年 人文書院)